とある少年の異世界旅行記

流星ぴーぽー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある少年の異世界旅行記

【Ｎコード】
Ｎ８２２０Ｓ

【作者名】
流星ぴーぽー

【あらすじ】
これはとある少年が神の手違いにより死亡。転生する物語です
原作＆オリジナルの話でいこーかと思います。　初めての作品なのでお手柔らかにお願いします・・・・これは二次創作なので「これ・・・むりぃ！！」というかたは戻るをオススメします。

第1話　片道切符

「ん・・・・・ここは？」

あたりを見回すとすべてが一点の曇りもない白の世界。

「おっかしいなぁ・・たしか俺は自分の部屋で寝てたと思ったんだが・・無意識のうちに他人の家に上がり　こんだのか・・？」

たしかに俺は今まで自分の部屋で寝ていたはず、それが目を覚ますと記憶にない所にいるのだからこれで混乱しない人間はいないだろう・・仮にいたとしたら拝んでやりたい。

「目ぇ覚めたかね？？」

まるでおとぎ話にでてくる神様のような格好をした老人が少年を心配そうに見ている

「え？？あ、はい・・・あの～俺達知り合いですかね？」

一瞬目を丸くした老人だったがすぐに申し訳なさそういった。

「いいや、ワシらが出会ったのは今が初めてじゃ・・」

「ですよね～いやぁ良かったぁ・・寝ている間にどっか人様の家に上がりこんだのかと思ったよ」

少年は心底安心したように言った

「そのことなんじゃが・・・スマヌ」

「うぇ!?」

突然老人が頭を下げてきたものだから少年も焦り始める

「実はキミと別の人間を間違えて天罰を与え殺してしまったんじゃよ・・・」

「え?ああ、そうですか」

「そうですかって・・・随分と他人事のように言っておるが死んだのは君じゃぞ??」

心なしか少し呆れているようだ

「ん~まぁ特に未練がどうとかということは無かったんで別にいいです。あっ・・・とある魔術の禁書　目録の新刊本買うの忘れてた・・・うっわ萎えるなぁ・・」

「うっ!!スマナイ・・・そのお詫びと言ってはなんだがキミの好きな世界へと転生させてやるというのはどうかのう?」

「好きな世界!?マジカ・・・それってあれか?不幸中の幸いか?」

「いや・・少し違うきもするがの・・・そういうことじゃ」

とたんにさっきまで暗かった少年の表情が一変する

「ひゃっほぅ!!最高だなぁ!あ~死んでよかったー!!んじゃぁ

さっそくよろしくな！」

「なんだか複雑な気分じゃ・・・・それではどこの世界がいい「んなもんわりきってんだろ？」・・・ハァ・・・最後のセリフ遮らんでくれ」

「はぁ？セリフ？な～に言ってんだじいさん」

「いや・・こっちの話じゃ、では転生後の世界を楽しんでくるといい」

少年の体が光につつまれ消えていった。

第1話　片道切符（後書き）

どうでしょう？？

気づいたこと、修正点あったら教えて！！

気合と何かで直したいとおもいます！！

第2話　不幸和音（前書き）

んん！？　見てくれた人がいたよ～～～！！！

とにかくうれしいな！！

んじゃ2話もよんでください！！！！

第2話　不幸和音

「ん・・・・・ここは・・？」

目を覚ますとそこは自分の知らない部屋でありそとの風景もまたしらないものであった。

「無事にこれたみたいだな・・・・それにしても何だ・・？知らないけど知ってる気がすんだよなぁ・・・特にこのベランダ・・・」

知らない、たしかにそこは少年の知らないはずの部屋である

「つーかさぁ・・・・暑い・・・暑すぎる・・・どうにかなんねぇかなぁ・・・」

そう、とにかく暑いのであるエアコンをつけようにも電源が入らず、とにかく窓をあけることでしかこの暑さを和らげることができない。

「ん～ここってあれだよね??学園都市だよね??んじゃぁやっぱ原作介入からのブレイクか??」

そう少年　霧島（きりしま）　時雨（しぐれ）は本来はここにいるはずのない転生者なのだ

「なんだかなぁ・・・・先を知ってたら楽しみが無くなっちまうよなぁ・・・たしかこの後・・・この・・・あ・・・と・・？・・・・・・・・！？」

わからない、さっきまで知っていたはずのこのあとの展開がまった

くもって思い出せなくなっていた

「どうなってんだ？・・たしかに頭はよくなかったがここまでじゃあなかったはずだ・・・多分・・・いやそうであると俺は願うよ・・・」

時雨が自己嫌悪に落ちている間に窓から紙飛行機が一つ入り時雨の頭に刺さる。そう刺さった。ぶつかり落ちるのではなくキレイにそれは刺さったのだ

「・・・ん？・・・ん～～・・・ん・・いいってぇぇ～～～～～！！！！、何がどうなってんだよ！！紙飛行機はな普通刺さらねぇんだよぉ！！血でてるしぃ！どこのだれだよ・・ったく痛ぇな・・」

一通りの言葉を床へと投げつけた紙飛行機に言い終えると、何かがかいてあるのに気がついた

「んあ？なんじゃこりゃ・・・え～とぉ・・何々？・・ふむふむ・・・って読めねぇよ！なんだよこれは！？どこの文字だよ！」

そこにはミミズの這ったような字が書いてあり、字というよりは幼稚園児の落書きのようにも見える

「ん？何だ？ここだけ読めるぞ・・！・・・・俺さぁ・・おかしくなった？」

複雑な気分になりながらもその字をよんでみる

「えーと・・≪この手紙は文字に触れることで字が読める特殊なおまじないが・・・≫ふざけたことしてんじゃねぇよ！！字のおまじな

い云々もどうかしてるが、まず人に刺すんじぇねぇよ！！」

などと一通りのツッコミを終えクールダウンしたところで文字に触れてみる

「≪これを読んどるということは無事にそっちの世界へ着いたようじゃの。知らせねばならぬことがいくつかあるんじゃ、しっかりと覚えなさい。一つはその世界の先を知っとると言うことはキミの性格上あまりよくないと判断し記憶を一部消させてもらった。もう一つは他の世界がそちらの世界に干渉する危険性があるということじゃ。理由はワシにもわからんがそれぞれの世界が不安定になっとるのは確かじゃ、それと最後に一つ、この手紙は頭に向かい飛んでいく習性がある・・・気をつけなさい≫・・・・・どう考えても遅せえだろーよじいさん・・・記憶は・・・まぁいっか」

他の世界からの干渉・・・いったい何がおこるのかはわからないが一つだけ言えることがある、それは・・

「やっぱ人生はこうでなくっちゃ・・・退屈な毎日はつまらない」

と密かに心弾ませる時雨であった

「まずはここがどこだかを知る必要があるな・・・見たところ一軒家ってわけでもないし隣の人へのあいさつも行かねーといけねーしな」

「不幸だーーーーーーーー！！！」

これからについて考えていると隣からもついさきほどの時雨とおなじ類の叫び声がきこえてくる

第2話　不幸和音（後書き）

第2話はいかがでしたか？？感想とか貰えるともっとうれしいです！

第3話　不幸隣人（前書き）

うわ～人増えてるよ～

お気にいりも増えるといいな～～

・・・・駄文・・・・自覚してんすよ

こんな夢見てもいいだろ！？

じゃあ3話どぞ

第3話　不幸隣人

「おぉ・・・・隣も随分とまぁ・・・その・・・うん・・」

世界に響きわたらんとばかりにあげられた叫びに若干同情しながらも軽い身支度をしていく

「やっぱまずはここら辺のことを知っとかないとなんないよな、まずはお隣の不幸少年Ａに挨拶しに行こうかな」

部屋の閉じまりを確認したあと隣の部屋のドアをノックする

コンコン

「・・・・・ん?、いるよなぁ・・?・・・・だってさっき声したし・・・まさかあの部屋には幽霊が!?・・・・萎え・・」

妄想に浸っているとドアの向こう側から足音が近づいてくる

「あ～今出るんで少し待っててくだｓ」

「ん?いるじゃん、いるならｔ≪ドンッ、ガラガラ、バキッ≫・・・え?・・何最後のばきって・・え?生きてんの?」

少し心配になりつつも待っているとようやく扉は開いた

「えっと～何かごようですか?」

「ん・・・隣の部屋になったから挨拶にでも来ようかなってさ」

（つんつんした黒髪ということ意外はわりと普通な人だ・・・・）

「俺は霧島　時雨　よろしくな」

「霧島？・・ああここに引っ越してくるっていってた転校生か、俺は上条　当麻　よろしく」

「当麻か、よろしくって・・・名前でもいいか？」

「全然かまわねえよ俺も時雨って呼ぶな」

（なかなかにいい人だすぐに心を開ける）

「そういえば学園都市に来たのは初めてなんだっけ？」

「ん？まぁそうだけど」

「そっか、なら俺が案内してやるよ」

「いいのか？？まだ会ったばっかの他人だぜ？」

「なに言ってんだよ俺達はもう他人じゃなくて友達だろ？気にすんな！！」

（・・・くぅ・・・いい奴すぎて泣けてくる・・）

「じゃあ頼むよ」

「わかった少し待っててくれ、準備してくる」

（ん～今度は大丈夫・・・だよな？）

「よし！じゃあ行こう」

何事もなく無事に現れた当麻に安堵し、学園都市案内へと出かけた

ーーー

復活した当麻は意気揚々に自動販売機へと二人分のお金を入れていく

「時雨は何にするんだ？」

「俺はフルーツ入ってればなんでもいい」

「わかった」

ボタンをおす

「あれ・・？」

「ん？・・・どうした？」

「ジュース出てこないんですけど・・・」

「売り切れか??」

「・・・・・・・・・いや・・入れたはずの金額が表示されてない・・・」

「ん・・・・やられたな」

（まさかここまでとはな・・・ある種の才能だ・・）

「不幸だ・・・・・・」

さっきまでの姿は消えそこには燃えかｓ・・ではなく、当麻がひざを突いている

「まぁ・・・しょうがねぇよ・・うん、帰ろうぜ？」

「ああ・・・・・」

――――――

第3話　不幸隣人（後書き）

どどどどどどうでしょう？・・・（焦

ん～やっと時雨と上条さんの出会い（え・・？なんかキショ出会い言うなよ・・・

まぁまぁそれは置いといて感想などなどお待ちしてます＞＜；

第４話　身体検査（前書き）

わぁ～・・・・見てくれてる人が増えてる～～

実力とは裏腹にやる気はぐんぐんあがります！！！

それでは４話どぞどぞ

第４話　身体検査

「ふぁ～～・・・ネム・・・」

はいみなさんオハコンバンワ霧島　時雨と申します。今ね学校の前に来たのはいいんだけどね・・・いやぁ緊張しちゃってもう・・・・ねぇ？。だって・・・俺人見知り激しいし？・・・うん。だから知らない人がいっぱいいるのはなぁ・・・・・でもこのままだと遅刻しちまうし・・・・行くしかないよね・・・・・・・

「えーと・・？ここが職員室・・・かな？」

コンコン

ノックをしてから扉を開く

「あの～・・・すいませ～ん・・・・・（泣」

意を決してあけてみたが先生方はお留守のようで誰一人いなかった

「うあ・・・・もう授業はじまってるとか？？・・・あぁ、めんど・・・・」

などと考え一人落ち込んでいると小さな女の子が声をかけてきた

「ここの生徒じゃないみたいですけどどうかしたんですか？？」

「ん？ああ、ここに転校してくることになってたんだけど先生がいなくてな・・・」

「あ～あなたが明日転校してくるっていう生徒の霧島ちゃんですね？？」

「え・・・なんで俺の名前知ってんの・・？つか明日・・・・？？」

「あ、先生はこの学校で教えてるんですよ」

「はぁ・・・・先生ごっこか・・？」

「先生は立派な大人です！！」

目の前の幼女は自分が先生だと言う。学園都市とはここまで科学が進歩したのか・・・

「そ・・そうですか・・・・え～と」

「　月詠小萌というですよ、それとさっき考えてたことをいったら先生おこりますよ？？」

考えよんでやがんよこの幼女

「霧島ちゃん？？」

「はっはい！！」

目が笑ってねぇよ～・・・・こわ

「す・・すみません」

「わかればいいですよ」

「ところで俺の転校してくる日って・・・」

「明日のはずですよ、霧島ちゃんはせっかち何ですね？」

あ・・・・明日・・・だと・・？早起きしたのに・・・？？？

「ま・・まじっすか・・・」

「あ、でも身体検査なら特別にできますよ」

「身体検査？？」

「はい、それで霧島ちゃんにどんな力があるのかわかっちゃうんですよ」

「おぉ！！！やります！！いえやらせてください！！」

「じゃあついて来て下さい」

ーーー

・・・

「はい・・・」

なげると、それは凄まじい速度で飛んでいく

「うお・・・」

「今のは物体の動きを時間的に加速させたものですね、逆にもどすこともできるはずです」

イメージすると手の中にさきほど投げた石がおさまっていた

「時間の操作がかかっているものは通常の時がながれているものとは別の次元にあるので通常の物の影響を受けません」

「はぁ・・・なるほど・・・」

「それと結果がでたのでお伝えします」

「能力名は時間掌握≪タイムトラベラー≫、Ｌｅｖｅｌ５です。それではおつかれさまでした」

ーーー

寝るか・・・」

そして転生二日目の夜は過ぎた・・・

第４話　身体検査（後書き）

キャラ崩壊・・・ん、知ってる

駄文・・ええ承知しております

みんな感想かいてな＾＾

初登校＊前編＊（前書き）

時系列的にいくと

上条さんはすでに記憶がおなくなりになられてると思うんですよね・・・

あってます・・？

ではでは～

初登校＊前編＊

「さぁて・・・今日こそ学校・・・・だよな・・？」

はいはい朝っぱら疑心暗鬼になってます時雨です・・・・・だってさぁ・・・昨日は先生（幼女）の前で大恥をかいてしまったわけでして、二度とあのような失敗はしまいと気を引き締めてたんですよね・・・・はい

「ん・・？まだまだ時間あんじゃねぇか・・・・もう少しねるか・・・」

そう、これが俺の今日おかしたミスのひとつ

ーーー

「おい！！んなとこでのんびり話してる時間あんのかよ！！」

「ん??時雨か、いやちょっとこのビリビリ中学生にだな・・・」

「だから！何度言ったらわかるのよ！私には御坂美琴っていうちゃんとした名前があんのよ！！」

「ん・・・・修羅場??」

「「ちげぇよ！！（ちがうわよ！！）」」

「仲いいんだな・・」

「あんたも私をバカにしているようね・・・・」

「え??・・・いや、別にそんな・・・」

「俺はビリビリの事をこれっぽちも馬鹿にした覚えはないぞ」

と・・当麻、命知らずな・・・・・

「あんたねぇ・・・・私はビリビリじゃないって・・・言ってんでしょーが！！！！」

御琴が一直線に雷をはなつ

しかし当麻にあたる直前にそれは止まった

「あっぶねー、普通あんなのを無能力者にぶつけるかね」

止めたのは誰がいうまでもなく時雨である

「そう、あんたが昨日Ｌｅｖｅｌ５になったていう時間掌握ね」

「ん・・まぁ・・・一応な」

「時雨！！！お前Ｌｅｖｅｌ５だったのか！？」

御琴わ冷静に当麻は若干興奮しているようだ

「ふ～ん、あんた名前は？」

「霧島　時雨だけど・・・・」

御琴はうつむいてるので表情はわからないが、危ない気がする

「え～と・・・そっそうだ・・・学校いかねぇと・・ハハ・・・うん、遅刻・・・する・・よな？」

「今から私と勝負しなさい！！」

「・・・・ハ？」

「だから・・勝負よ勝負」

「うん・・・それは知ってる・・・俺とお前が勝負する意味がわからん」

「それは私が４位であんたが３位だからにきまってんでしょーが」

「へぇ・・・・・じゃあ俺8位でいいや・・うん、じゃあな」

そういって立ち去ろうとした時雨の横ギリギリを雷の槍が飛んでいく

「あのさぁ・・・はぁ・・・しょうがねぇなぁ・・・・少しだけだぞ・・？」

「いいわよ、そっこうで片付けてやるから」

「当麻お前先に学校に行ってろよ」

「あぁわかった、気をつけろよ？」

当麻も御琴が相手ならばそこまで危険になることはないだろうと思っているのか案外あっさりと行ってしまった

「ん・・・まぁとりあず場所変えるか」

ーーー

「後ろ・・・がら空きだぜ・・？」

「なっ！？・・・あんたいったいどうやって・・」

「忘れたのか・・？俺の能力は時間掌握、今のは・・うん・・・名付けて時間移動だな」

「時間移動・・？」

「そ・・・俺はお前の後ろに一秒まえからいたんだぜ？」

「そんな・・！！だってさっきまでは」

「はぁ・・・めんどいな・・・さてどうしてやろうか？」

などといったものの内心焦っていた、そう、どうやって攻撃したらいいのかがまだわからないのだ

「お前の攻撃は何一つ俺にはきかない」

「そんなの・・やってみなきゃわかんないわよ！！」

そういうと御琴はポケットから一枚のコインをとりだす

「（レールガンか・・？）」

指で弾かれた直後それはオレンジのレーザーとなって時雨にとんでくる

「たしか・俺の能力で止まってるものは通常の時を進んでるものの

影響をうけないんだったな」

時雨はそれをよかずに其の場から動かずにいる。

「なっなにやってんのよ！？」

さすがに御琴もこの事は予想外だったようでかなりあわてて

直後凄まじい爆音とともに時雨のいた部分は爆発する

「はぁ・・・・疲れた」

「・・・・・どうして・・」

そこにはいるはずのない人物が無傷でたっている

「ん・・・おれ自身を止めてみた・・・・うん、まぁ詳しく言えば俺の周りかな・・・案外いけるものなんだな」

「・・・・・・・・・・・・・・」

「んじゃ・・・俺は行くよ・・・まだ間に合いそうだし」

「まっまだ決着はついて・・・」

しかし、そこにはすでに時雨のすがたはなかった

ーーー

「し・・・死ぬかと思ったぁ」

二つ目のミスである電撃娘との接触も無事おわった

今俺は時間移動を使いギリギリ遅刻せずにすんだ

クラスは当麻と同じになれたので少し安心し、これからの授業にそなえ準備するのであった・・・・

初登校＊前編＊（後書き）

うぁ・・・めちゃくちゃになってきましたね・・・ホントすいません

でもでも次回も書きますよ・・・？

初登校＊後編＊（前書き）

お・・・お気に入りが増えた・・・・だと・・？

お気に入りにしてくださった方々本当にありがとうございます！！！

ちなみにこれは日常オリストーリなので本編には関係ない上に短いっす＾＾；

でもでも後編かいた時は本編更新しようと思ってるんで、ね？・・・・

うん

じゃあ次もどぞどぞ

初登校＊後編＊

「いよっし！！気合いれてくかぁ！！」

・・・・・・一時間後

「ん・・・・・ん？」

「時雨・・・・・・転校初日・・・それも最初の授業からねてるなんて・・・・・・」

「ん・・あぁ、当麻か・・・俺寝てた？」

「ああ、これでもかってぐらい寝てたぞ」

「まじかよ・・・・次はがんばんねーと・・・・」

「今日は午前中だけだから午後の授業はねーぞ」

なに・・・・！？今こいつは何といった・・・？？授業が・・・・ない？？

「ま・・・・まじか・・？」

「まじだ」

「じゃあ俺は今日一日中寝てたのか・・？」

「ああ、そうなるｎ」

「なんで起こさねーんだよぉ！！」

「起こそうとしたけどおきなかったんだよ！！」

「はぁ・・・不幸だ」

「それは俺のセリフだぞ・・？」

こうして俺の初めての授業は幕をとじた

「ぜったい、今朝の女のせいだ・・・・ぐすん」

いつかしかえししてやろうと密かに決心したのだった

初登校＊後編＊（後書き）

どうでしょうかね・・・・・・

次もがんばっていこうとおもいます

第5話　御坂御琴？（前書き）

ん～とびますなぁ・・・・・・・

すいません

第5話　御坂御琴？

今日は休みで天気も最高！！これは神様がきっと俺に散歩しろといってくださってるにちがいない！！！ってことで今は散歩の途中で

「あ～やっぱ天気のいい日には外にでるにかぎんなぁ」

今おれはとっても機嫌がいい。もう、見知らぬ人に何かおごってあげてもいいぐらいだ

「ん??アレは・・・・御坂か・・？」

そのさきには一人で歩いているあのびりびり中学生だった

「お～い、お前ひとりでなにやってんの・・？」

「ミサカのことですか?、とミサカは不思議そうに首を傾げながら返答します」

「お前以外にここにはいねぇし、つか首傾げてねぇし」

「そうですか、それで何ですか?、とミサカは困惑しつつ尋ねます」

「ん?、ああ、こんなとこで何してたんだっつう話」

「あれを見ていたんです、とミサカはあなたの質問に答えます」

「雲か?」

「はい」

「そっか・・・ってお前さ、そんなごっついゴーグルつけてたっけ??」

「きっとあなたが言っているのはお姉さまことでは?とあなたの質問に質問でかえします」

「はぁ・・・あいつ妹いたんか・・・まぁ・・・なんだ、呼び止めて悪かったな、またな」

軽い挨拶を済ませその場を離れる

「まさかあいつに妹がいたなんてな・・・・・」

気がつけばもう日は暮れていた

「そろそろかえるか・・・・」

そうして家え向けて歩き出した

第5話　御坂御琴？（後書き）

短いですね・・

こまめに更新するとＨＰが削られて・・文字数減るんですよね・・・

そこでこまめに更新するべきか否かいま考えてるんですがどうでしょう？

次回も懲りずに書くのでよろしくお願いします！！

日常１＊歌姫＊（前書き）

んん、サブですね・・・・はい

日常1＊歌姫＊

「やっぱ、散歩サイコー！！」

俺はとある公園を散歩中である、ここは木がたくさんありいい感じに涼めるので散歩には最高なのだ

「やっぱさ・・・こーゆー時は散歩だよな！！！」

上機嫌で歩いているとおくの森のような場所に一瞬人影が見えた気がした。

「ん？誰かいたか？？でも、あんな場所普通のやつならよんねーし、スルー・・・・・できねー・・・何か一度気になったら気になってしょうがない・・・・・見に行くか」

軽く走っていくと複数の人の気配があったので気配をけして近づいていく

「・・・・・・・・・」

なにやら話しているようだがここではよく聞き取れないのでもう少し近づいてみるとそこには緑の髪の女の子が複数の男達に囲まれているが見えた

「いいじゃねぇかよぉ」

「少しぐらい遊ぼうぜ～キャハハ」

男達からはあまりよろしくない気配を感じる、女の子のほうはおびえているようで震えていて声もでないじょうたいだった

「や・・・やめて下さい・・・ジャ・・・ジャッジメントに連絡しますよ」

「はぁ！？ククッ何いってんだよ」

「ホント人間でもねぇのによ」

「キャハハハハハ」

「ほ・・ほんとに呼びますよ・・！！」

「はぁ・・・生意気いってんじゃねぇよこのクソが！」

パシンと男が女の子を殴った瞬間俺の中で何かが切れた

「オイ・・・・てめぇらよぉ・・・ナニやってンだ？？」

「あ？？何だお前俺らは忙しいんだよ、黙ってかえんな」

「ハッ・・・ンなことを俺が聞くとでも？？これだから下種な畜生は困るよ・・ククッ」

「どうやら、ちっとばっか痛いめにあわねぇと駄目らしいなぁ」

「来いよ・・・まとめてスクラップだ」

「オラァ！！！」

の男が時雨に殴りかかった
パキィッ、だがその拳は届かず見えない壁に阻まれ殴りつけたその拳は砕けていた
「ギャァァァ！！痛ぇよお」
「いちいち喚くんじゃねえよ騒がしい」
「能力者！？チッなら俺がやる！！」
「あ？？」
男は火の玉は時雨にとばすがそれはまるで凍りついたように停止した
「なっなんで！？」
「自分で考えな」
時雨が男に手を向けると衝撃波が生まれ吹き飛ばされる
「手加減はした・・・・さぁて次・・・・やるか」
「なんだよお前！！」
「タイムトラベラーっていうらしいぜ」
「レ・・・レベル5・・・！？」

「にっ逃げろぉ！！殺される！！！」

男達はまるでクモの子を散らすように逃げていった

「君、大丈夫??」

「は・・・はい、ありがとうございます・・うぅ」

「怖かったんだね、もう大丈夫だよ」

「うぅ・・・うん」

・・・

「いっいえ、謝んないで下さい！」

「まぁ大体の事情はわかったよそれなら家に来るか？？」

「そっそんな助けてもらったうえに家まで・・・」

「嫌ならいいけど・・」

「いっ嫌じゃないです！！！」

「うぉ」

「す・・すみません／／／」

「はぁ・・・じゃぁ命令な家にきなさい！！」

「はっはい！！」

ーーー

「いやお前風邪ひいちまうだろ」

「私よりもまずは、マスターです！！」

「いやいや、駄目だし」

「なら、一緒に寝ましょう！！」

「はぁ！？／／／なに言ってんだこのバカ」

「今バカって言いましたね！？お詫びとして一緒にねてください！」

「はぁ・・・・しゃぁねぇな・・・」

「電気消すぞ」

・・・・

「！！！・・・・・・はい」

「そっか」

「あのマスターじゃないですよ！？」

「ん？？んなことわかってるよ」

「ただ、暗いのは前捨てられたときを思い出すから・・・・」

「大丈夫、俺はお前をすてねぇよ」

静かに優しく頭をなでる・・・え・・？めっちゃサラサラやん

「はい・・・／／／／」

こうして初めてできた同居人とのはじめての夜はおわった

日常1＊歌姫＊（後書き）

うん・・・・何も言うべからず

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8220s/

とある少年の異世界旅行記

2011年10月9日00時40分発行